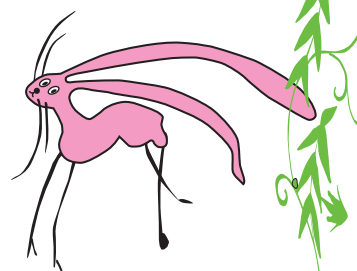


平安京跡・二条城北遺跡

調査期間：令和5年2月6日（月）～10月頃（予定）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について(図1～4)

調査地は堀川通と竹屋町通の交差点の北西に位置しており、「平安京跡（左京二条二坊六・七町、大炊御門大路）」及び「二条城北遺跡」に含まれています。ここは平安宮のすぐ南東部に位置しており、六町域を含む一帯は、嵯峨天皇の離宮である「冷然（泉）院」があったことが知られています。また、竹屋町通の北側には江戸時代に京都所司代が所在していました。

周辺では本調査地の西側や二条城内を中心に発掘調査が実施されており、平安時代～江戸時代にかけての建物跡や区画溝、庭口跡などが確認されています。特に、大炊御門大路の南側では冷然（泉）院の北築地に伴う内溝が確認されており、そこから平安時代前期の土器などが大量に出土しました。その一部は、京都市指定文化財「平安京左京二条二坊 「冷然（泉）院」出土品」となっています。

以上の周辺調査を踏まえ、本調査地における遺構の展開状況を明らかにするために発掘調査を実施しています。調査区は計画地全体に設け、3つに分割して調査を実施しています。調査面積は合計で約1700㎡です。

2 周辺の歴史

史料等によると、七町域には平安時代前期には神祇官町、後期には記安部宗重の邸宅が所在していました。また、六町域は冷然（泉）院の一角であったことが判明しています。冷然（泉）院は弘仁7年（816）に初めて史料上で名前が確認できます。嵯峨天皇の離宮として造営され、退位後は後院として使用されたようです。その後は、約200年もの間にわたって代々皇室に伝領されましたが、中世になると付近の記録は希薄になり、その状況は不明瞭になります。

江戸時代に入ると現在の竹屋町通の南側には二条城、北側一帯

には京都所司代が造営されます。本調査地は、京都所司代の中屋敷に当たります。中屋敷は堀川屋敷とも呼ばれます。当初は、所司代の長であった板倉勝重の拝領屋敷であったようですが、次第に所司代で働く家臣の居住地となったようです。

3 今回の発掘調査成果(図5)

平安時代から江戸時代にかけての遺構を確認しました。その大半は江戸時代のもものが占めており、これは所司代中屋敷にかかわるものと考えられます。この時期の主な遺構としては、地下式の室と考えられるSK56やSK274、井戸と考えられるSE34やSE47、SE149、給排水の溝と考えられるSD263、区画溝と考えられるSD269、土取り土坑と考えられるSK61等があります。また、現時点で性格は不明ですが土坑であるSK236・251・266等は、炭や焼土を多く含んだ土で埋められており、鞆の羽口や鉄滓が出土していることから、近くで鍛冶に関連する作業を行っていた可能性もあり注目されます。

中世の遺構としては、室町時代の井戸であるSE32がありますが、中世の遺構・遺物は非常に希薄です。

平安時代に遡る遺構としては、井戸と考えられるSE51、区画溝と考えられるSD270、瓦溜まりであるSX261、土坑であるSK262やSK233があります。特にSD270は推定位置から若干ずれますが、大炊御門大路の南側溝の可能性があり、当時の土地区画を考えるうえで注目されます。

本調査では、土地利用の中心が平安時代と江戸時代にあり、中世段階ではそれほど活発ではない状況を確認しました。これは文献史料とも合致します。また、周辺調査で確認されている冷然（泉）院の北築地に伴う内溝を本調査では確認することができませんでした。遺跡の標高などを踏まえるならば、この内溝は町域単位で深さ等が異なっていた可能性があります。これらの成果は周辺の歴史を考えるうえで重要な成果といえます。（熊井 亮介）

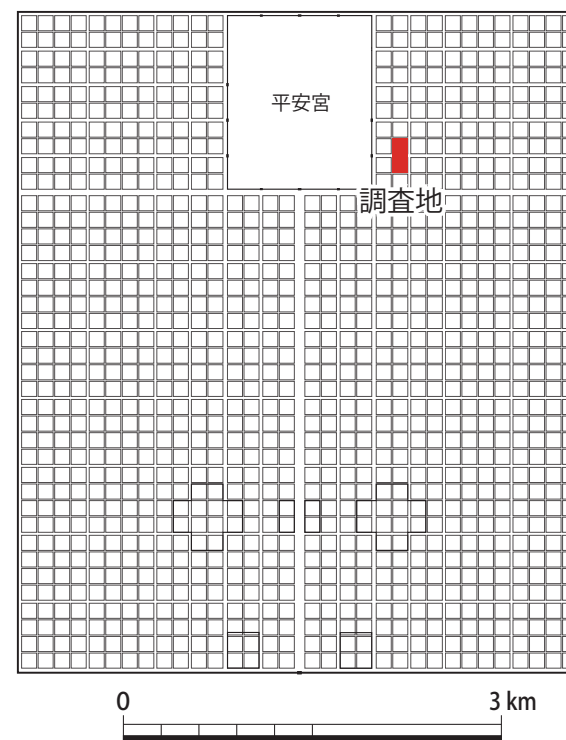


図1 調査地点

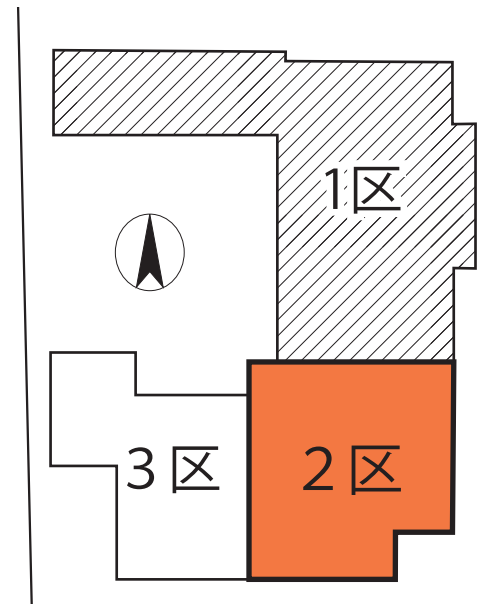


図2 調査区配置図

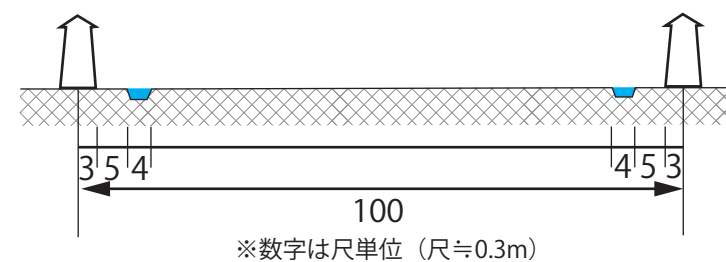


図3 大炊御門大路 断面模式図



図4 調査位置図および周辺調査事例



図5 調査区平面図